

---

# 重甲ビーファイターー夏

蛇

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

重甲ビーファイター一夏

### 【Nコード】

N2315Z

### 【作者名】

蛇

### 【あらすじ】

虫と自然が好きなかただけであとは運動ができるくらい青年、織斑一夏は誘拐されたところを巨大なカブトムシに助けられた。そしてカブトムシから侵略者と戦ってほしいとお願いされる。ビーファイターのopを聞いてたら無性に書きたくなった。後悔はしていない。敵は基本的にオリジナル。原作と違う展開あり。それでもいいというかたのみお読みください

## プロローグ（前書き）

とりあえずプロローグから

## プロローグ

外国にいけば日本じゃ見られない虫と出会える。そう思ってI Sの世界大会にでる姉さんについていたら変な奴らにさらわれた奴らの車の中で俺は後悔した。ちゃんと姉さんの言うことを守っていれば、こうやってさらわれずにすんだのに。そう思っていると突然車が止まった。と、思ったら巨大なカブトムシに抱えられて空を飛んでいた

なにごとかと思ひ下を見れば奴らの車が炎をあげて燃えているカブトムシは混乱する俺を下に降ろすと人の姿になった

「織斑一夏君だね。君に頼みがあるんだ」

「へ、え、え、頼み？」

「この世界に侵略者がやってくる。侵略者の目的はこの地球の自然の破壊。その侵略者と戦ってほしいんだ」

「え、侵略者？というかなんで俺？」

「私が渡す力は虫を愛する心を持ち、なおかつなかなかの運動能力を持つ君にしか使いこなせない。お願いだ、この世界を侵略者から守ってくれ」

カブトムシが頭をさげる。俺はこのときかなり混乱していた。さらわれたと思えばカブトムシに助けられ。そのカブトムシに世界を守ってくれと頼まれる。だけど、答えは決まっていた

「わかった。俺がやるよ」

「本当かい！」

了承したのは別に混乱しすぎて頭がおかしくなったとかではなく、世界を侵略者から守るといというのがカッコイイと思ったからだ。ただもちろんそれだけではない。自然を破壊する。その行為がゆるせない。なにより自然を破壊されたら虫たちと出会えなくなる。そう思ったからだ

「では、これを君に渡そう」

そういつてカブトムシはなにかを渡してきた。頭にカブトムシの角がついていて透明な羽の下に機械があるのがわかる

「それは我が一族の最新の技術を詰め込んだものだ。使い方は時期がきたとき、それが教えてくれる」

それだけいうとカブトムシは元のカブトムシの姿に戻り飛んでいつてしまった

この時から俺、織斑一夏のお話が始まる。普通じゃない物語が

「重甲！」

重甲ビーファイター一夏

今物語の幕が開く

## 第1話 誕生！ビーファイター（前書き）

お待たせしました。第1話です

## 第1話 誕生！ビーファイター

ここは次元の間。そこに一隻の海賊船が浮かんでいる

「キャプテン・ドーム。まもなく地球の存在する次元に到着いたします」

『うむ、お前達。いよいよ我らマドゥー海賊団が地球を征服するときがきた。みななもの、準備はいいな？』

「「「オーーーーー！！！」」」

「ですがドーム様。地球にはつくきビータム一族が住み着いたという情報がありますが」

『ふん、ビータム一族などもう敵ではないわ！それよりマドラス。合成獣はできておるか？』

「ああ、できとるよ。で、こいつを地球に送り込みゃあいいんだね？」

『その通りだ。早速送り込め！』

「はいよ。というわけだ。いきな、合成獣力二ノコギリ」

「クキャキャ！」

直立している力二。ハサミがノコギリになっている力二ノコギリは意気揚々と地球へとむかった



地球

「やばっ！もうこんな時間だ！」

織斑一夏はパンを牛乳で流し込むと鞆を掴み慌ただしく家を飛び出した

「ああ、くそ。もつと早く起きてれば」

ブツブツと愚痴を呟きながら駅に向かって走る一夏。なぜ彼がここまで急いでいるのか、答えは簡単。高校の入試に遅れそうなのである。彼が受けようとしてるのは藍越学園。私立でありながら格段に安い学費と卒業後の進路もケアしてくれるということ。受験を決めた高校である。しかし昨年におきたカンニング事件により試験会場入試の二日前に通知するというはた迷惑な政府の御達示があり、その試験会場が思ったより遠かったのである。事前に準備はしていたがそれも寝坊による焦りによって消え、今ただひたすら走っているのである

電車に乗り試験会場行きのバスに乗り換える。そのとき一夏はバスの中に一人、見覚えのある女性がいるのに気づく。その女性の座る席に近づく一夏

「第？第……だよな？」

女性は一夏のほうに顔を向けるととたんに驚いた表情になる

「い、一夏！？なぜ、ここに！？」

「試験会場にむかっただよ。それにしても久しぶりだな。隣、いいか？」

「あ、ああ。別に構わんぞ」  
「隣の隣に座る一夏」

「そ、それにしてもよく私だとわかったな」  
顔を赤くしながら言う一夏

「ん？そりゃあ幼なじみだし顔を忘れるわけないだろ？」

「・・・・・・・・」

赤かった顔は元に戻り。少し暗くなる一夏

「そういえば剣道の全国大会で優勝したんだってな。新聞で見たぜ」  
そんな一夏の様子に気づくこともなく、たわいのない話を続ける一夏。  
そのときバスが大きく揺れ一夏と一夏はガラスを突き破り外にほうりだされる

「うつ・・・・・・・・うつ。一夏、大丈夫か？」

「な、なんとかな。それより何がおこったんだ？」

二人がバスのほうを見るとバスは横倒しになり上に力二の化け物が乗っている。合成獣力二ノコギリだ

「な、なんだあいつ！？」

「ケーケツケツ！む？助かったのがいたか。いいだろう、この力二

ノコギリ様がじきじきに殺してくれるわ！クエー！」  
そう言うとかニノコギリは腕のノコギリを振りかざし襲い掛かってきた

「うわぁ！」

咄嗟に近くにあった鉄パイプでカニノコギリのノコギリを受け止める一夏

「クエー！抵抗するか地球人！ならば、現れよシタツパー！」

どこからともなく現れる様々な色のバンダナをつけた、いかにも下っ端ですといった感じの怪人達

「くそっ！なんだよこいつら！」

箒も鉄パイプを手にとり構えるがあきらかに数が違う

一夏達に襲い掛かるシタツパー。そのとき！巨大なカブトムシが飛んできてシタツパー達を吹き飛ばした！

「あの時のカブトムシ！そうだ、そういえば……」

服のポケットから以前カブトムシに渡された謎のツールを取り出す一夏

「そうだ織斑一夏！重甲と叫び、そのビーコマンダーを天へとかざせ！」

人の姿になりシタツパーと戦いながら叫ぶカブトムシ

「よし、重甲！」

一夏はビーコマンダーを右手に持ち腕をXの形にクロスさせ重甲と叫ぶ。するとビーコマンダーの閉じていた羽が開く

「ハッ！」

それを天へとかかげる。するとビーコマンダーから光の粒子が出て一夏の体を包んでいく。光が消えたときそこに立っていたのはカブトムシの角を生やした全身を青いアーマーで包んだ戦士だった

「これは……」

「い、一夏なのか？」

一部始終を見ていた篤はかなり驚いている

「それこそが君の力！ビーファイターのブルービートだ！」

「ブルービート……」

変身の余韻にひたる一夏

「ええい、なにをしているシタッパ共！とつとやつらを殺せ！」  
しびれをきらしたカニノコギリがシタッパ達に命令をする  
命令によりブルービートにむけてレーザー銃を乱射するシタッパ達

「うおおお！？……ってあれ？効いてない？」  
レーザー光線をくらうもブルービートの体には傷一つない

「よっしゃ、これなら！うおおお！」

シタッパに突っ込んでいくブルービート。攻撃をしかけてくるシタッパ達をパンチやキックで倒していく

「はあっ！てやつ！とりゃあ！」

「ムムムム、クエー！」

シタッパをすべて倒すと今度はカニノコギリが襲い掛かってくる。  
カニノコギリの攻撃をくらい吹き飛ぶブルービート

「いてて、なにか武器はないのか？」

すると顔の内側のモニターにある武器の詳細が映し出される

「インプットマグナム・・・これか！」

腰のホルスターのインプットマグナムを抜き後方のレバーを引き1・0とボタンをプッシュする

「はあっ！」

インプットマグナムからレーザーが放たれカニノコギリを撃ち抜く

「ぐわあああ！」

マドゥー海賊団 海賊船

キャプテン・ドームが戦いの様子を見ている

「ちいつ、ビータム共め、邪魔をしおって。こうなったら・・・」

『  
キャプテン・ドームはどこから杖を取り出すとなにやら呪文を唱え始めた

『キエエエエ！！！！』

カニノコギリを追い詰めるブルービート。その時なんと空が割れカニノコギリとブルービートを吸い込んだ

「一夏!？」「これはまずいね。マドゥーエリアだ」

「な、なんなんだ？そのマドゥーエリアとは」

「マドゥー海賊団の船長キャプテン・ドームが作り出す異空間のことさ。マドゥーエリアの中ならマドゥー海賊団のやつらはこちらでは発揮できない100%の力を発揮することができる」

「で、ではさっきまでは100%ではなかったというのか？」

「……残念ながらね」

「一夏……」

ブルービートは荒れ果てた荒野に立っていた

「ここ、どこだ？」

「クエーケツケツ！ここはマドゥーエリアさ！俺様を倒さないかぎり、ここからは出られないぜえ！」

「はん！なら簡単じゃねえか」

「言ってる小僧！クエー！」

ブルービートに飛び掛かるカニノコギリ

「このっ、うわっ！」

カニノコギリに投げ飛ばされるブルービート

「くらえええええ！」

カニノコギリの口からビームが放たれブルービートに直撃する

「うわああああ！」

吹き飛ばされ地面に倒れるブルービート

「クエーケツケツ！さっきまでの威勢はどうした？小僧？」

「くっ、うう……」

「クエーケツケツ！貴様にとどめをさしたらもう邪魔するものはいない！地球を破壊しつくしてくれるわ！クエーケツケツ！クエーケツケツケツケツ！」

倒れているブルービートを見ながら高笑いを続けるカニノコギリ

「……ざけんな」

「クエ？」

「ふざけんなよカニ野郎」

ふらふらと立ち上がるブルービート

「クエーケツケツ！まだやる気か小僧」

「てめえらなんかに、地球を、好きにさせるか！」

ブルービートのモニターにある武器の詳細が映し出される

「スティングーウェポン！」

背中に右手を廻すブルービート。すると先が剣になっている変わった武器が握られる

「スティングーブレード！」

スティングーブレードをにぎりしめ、ブルービートはカニノコギリにむかっていく

「はあっ！」

「なんの！」

カニノコギリはスティングーブレードによる斬撃をノコギリで受け止める。が、ブルービートはそのノコギリごとカニノコギリを斬っ



てしまう

「ぐわあああ！俺様のノコギリがああ！」

ブルービートはスティンガーブレードを上段に構える。するとスティンガーブレードの背部がスライドしファンが露出する。そしてそのファンの回転とともにスティンガーブレードの剣の部分が回転を始める

「ビートルブレイク！」

回転するスティンガーブレードでカニノコギリを縦に斬る

「ぎゃああああああ！」

カニノコギリは悲鳴をあげるとそのまま爆発した

「空が！」

空が再び割れそこからブルービートが飛び出してくる

「一夏！」

ブルービートは変身を解除し一夏の姿に戻る。そんな一夏に駆け寄る第

「凄いよ。期待していた以上だ織斑一夏」

かなり感心したようすで一夏に近づくカブトムシ

「へへへっ。って今何時だ!？」

慌てて腕時計を見る一夏

「やばい!これじゃあ間に合わない!」

「なら、僕が送ってあげよう。せめてものお礼だ」

カブトムシは人の姿からカブトムシの姿に戻ると一夏と箒を抱え上げ飛び立った

「おおー、これなら間に合う。サンキューカブトムシ」

「そういえば言ってなかったね。僕の名前はパルプ。カブトムシじゃないよ」

「そうなのか。じゃあサンキューなパルプ」

マドゥー海賊団の合成獣、カニノコギリをしりのぞけた織斑一夏。しかしまだ戦いは始まったばかりである。戦え織斑一夏!戦えビーファイター!地球に平和を取り戻すその日まで!

なおこの後試験会場についた一夏がその複雑な内装から迷い間違つてIS学園の試験場に入りISを起動させてしまうのは余談である

## 第1話 誕生！ビーファイター（後書き）

作者がビーファイターを見たのが結構前なのでうる覚えなところがあります。ご了承ください

**第2話 織斑一夏抹殺命令!?!登場、二人目のヒーファイター(前書き)**

2話です。二人目の登場です

## 第2話 織斑一夏抹殺命令!? 登場、二人目のビーファイター

次元の間 マドゥー海賊船

キャプテン・ドームの前のモニターには一夏の姿が映し出されている

「この男が我々の邪魔をしているのだな?」

「そうさね。しかもビータム一族が絡んできるときなものだ」

キャプテン・ドームの問いにマドラスはなんともめんどくさそうに答えた

「……邪魔だな。マドラス!」

「あいあい。合成獣の準備はできとるよ。いつてきなバクダンアゲハ」

「フオー!」

アゲハ蝶とバクダンの合成獣、バクダンアゲハはひとなきすると地球へとむかった

「（なんだこの状況）」

織斑一夏は現在の状況を嘆いていた

現在このクラスには男は一夏しかない。当然だ。例外でもなければISは女性にしか動かせないのだから

その例外になつてしまったのが一夏だ。試験場を間違えISを動かしてしまったのだから。それゆえに貴重な存在としてIS学園にほり込まれ、今、女子達の好奇の視線を受けている。まあ、視線を集めている理由はそれだけではないのだが

「これならマドウー海賊団と戦うほうが数倍楽だ」

ぽつりと呟く一夏

あの後、何度かマドウー海賊団と戦ってきた。今のところは一人でなんとか勝ててはいるが。最近はずがに辛いものがある

「（仲間がいればな）」

一緒に戦ってくれる仲間がいれば。切実にそう思う一夏

ふと箒の座る席に目をやる。箒とはカニコギリとの戦いのあともちよくちよく会っている。一夏に力を与えたパルプを除けばブルービート＝織斑一夏だとゆういつ知っている人間だからだ。もちろん理由はそれだけではないが箒のためにもここでは割愛させていただく視線に気づいたのか箒がこちらに目をむけるがすぐに逸らしてしまう。気のせいかな、その顔はほんのり赤く染まっていた

その時教室に一人の女性が入ってきた。緑髪で眼鏡をかけた可愛いらしい女性だ

「皆さん初めまして。このクラスの副担任をつとめます山田真耶といます。皆さん一年間よろしく願いますね」

山田真耶と名乗った女性はニコリと微笑むとクラスを見渡す。そして一夏を見て視線が止まる

「え、えっと。織斑一夏くんですよな？」

なにやら慌てた様子で一夏に聞いてくる真耶

「はい、そうですけど」

「そ、その頭の上のカブトムシは……」

そう。一夏の頭の上にカブトムシが乗っていたのだ

「こいつですか？こいつはパルプっていいます」

一夏の頭の上に乗っているカブトムシの正体。それは一夏に力を与えたパルプだった。パルプはカニノコギリとの戦いの後、一夏を見守るためサイズを日本のカブトムシサイズに変え、こうして一夏の頭の上に乗って生活を共にしているのである

「い、いえ、名前を聞いているのではなくてですね？そのー、なんでカブトムシを頭に乗っているのですか？」

「ダメですか？こんなに可愛いのに」

そういいながらパルプを人差し指でなでる一夏

「あ、いえダメというわけではなくてですね？というか可愛いんですか？」

その言葉を聞いたとたんバン！と机を叩き立ち上がる一夏

「なに言ってるんですか！虫はものすごく可愛いんですよ？そもそも虫というのはですね」

また始まった。と、うんざりした顔になる篤。一夏に虫の話題を振るとそれだけで2時間は喋り通すので友人の間ではNGとされている。現に篤も小学生のころ、虫嫌いだった自分をそこそこ好きにさ

せるほど虫の良さを話されたことがある  
まあそこもカッコイイのだからと思う篇

「だから虫というのはですね」

まだ喋り続ける一夏。その後ろに一人の女性が忍び寄る。危機を察知したパルプが頭を離れた直後、一夏の頭に出席簿が振り下ろされる

「いだあ！」

机に突っ伏し痛み悶える一夏

「まったく、お前は教師を洗脳する気か？」

痛み悶える一夏を見下ろしながら女性はため息をはく

「いたたつ、つて千冬姉！？いだっ！」

再び振り下ろされる出席簿

「織斑先生だ」そう言い放ったのは一夏の姉、織物千冬である

「あ、織斑先生。もう会議は終わられたんですか？」

「ああ、山田君。クラスへの挨拶を押し付けてすまなかったな」

「あ、それが生徒の自己紹介がまだでして」

「む、大方こいつのせいだろう」

そう言いながらバンバンと出席簿で一夏の頭を叩く

「まあいい。先に私が自己紹介しよう」

そう言い教壇の脇に立つ千冬



「諸君、私が織斑千冬だ。君達新人を一年で使い物になる操縦者に育てるのが仕事だ。私の言うことはよく聴き、よく理解しろ。出来ない者には出来るまで指導してやる。私の仕事は弱冠15才を16才までに鍛え抜くことだ。逆らってもいいが、私の言うことは聞けいいな」

千冬の自己紹介が終わるとクラスが黄色い声援で包まれた

「キヤーーーーー！千冬様、本物の千冬様よ！」

「ずっとファンでした！」

「私、お姉様に憧れてこの学園に来たんです！北九州から！」

「あの千冬様にご指導いただけるなんて嬉しいです！」

「私、お姉様のためなら死ねます！」

キヤーキヤーと騒ぐ女子達をうつとうしそうな顔で見る千冬

「……毎年、よくもこれだけ馬鹿者が集まるものだ。感心させられる。それとも何か？私のクラスにだけ馬鹿者を集中させてるのか？」

その言葉にさらに騒ぎだす女子達

「きゃあああああつ！お姉様！もっと叱って！罵って！」

「でも時には優しくして！」

「そしてつけあがらないように躡をして〜！」

そんな状況を尻目に一夏に話しかける千冬

「で、お前はまた虫のことで熱くなつて大事なS H Rの時間を潰したのか」

「いや、つい癖で。というかなんで千冬姉がここにつだあ！」  
また叩かれる一夏

「織斑先生と呼べ」  
このやりとりに周りがまた騒がしくなる

「え？織斑君つて千冬様の弟？」

「それじゃあ、世界でゆうつ男でI Sが使えるっていつもの、それが関係して？」

「いいなあつ。代わつてほしいなあつ」  
それを気にすることなく千冬は真耶に指示をだす

「山田先生。早く自己紹介を」

「あ、はい。では、出席番号順に自己紹介をしていってください」

「時間がないから早くしろ。まずは出席番号1番」  
このあと、なんとか時間内に全員の自己紹介を終える。ちなみに一夏は虫の良さを語ろうとして。また叩かれていた

特になにごとまなく一時間目が終わり、一夏は机に突っ伏していた。一時間目の内容はIS基礎理論。男であり興味の対象が虫に向いていた一夏にとつてはまったくわからない内容である。突っ伏している理由はそれだけではない。周り視線を合わせないためだ。教室も廊下も女子だらけ。その全員が一夏に視線をむけている。一夏は世界でゆうついつISを動かすことのできる男。そのニュースは世界中で報道された。それゆえにこのIS学園の女子達にとって興味の対象なのだ。

一夏と話がしたい。話しかけるのは恥ずかしいし話しかけてくれな  
いかと見つめる教室の女子

動物園のパンダを見る感覚で一夏を見る廊下の女子

そんな状況は二時間目が始まる直前まで続いた

## 二時間目

「であるからして、ISの基本的な運用は現時点で国家の認証が必要であり、枠内を逸脱したIS運用をした場合は、刑法によって罰せられ」

すらすらと教科書をよんでいく真耶。一方一夏はまったくついて行

けなかった

「（なにを言ってるのかさっぱりわからん）」

一応教科書を開いて真耶の読んでいるであろう部分を見てみるがなにが書いているのかさっぱりわからない

「（このままじゃまずい）」

そう思った一夏は手を挙げる

「どうしました織斑くん。なにわからないところでもありましたか？」

「はい。全部わかりません」

なぜか誇らしげに宣言する一夏

「ぜ、全部ですか？」

「はい、全部です」

その言葉に教室の隅で控えていた千冬が近づいてきた

「織斑、入学前の参考書は読んだか？」

なんと答えたらいいかわからない一夏。実は参考書はマドゥー海賊団の合成獣と戦っていたときに敵の炎が当たってしまい燃えてしまったのだ

「……燃やされました」

とりあえず合成獣のことは隠し話してみる一夏。次の瞬間には叩かれていた

「嘘をつくならもっとまじな嘘をつけ。あとで再発行してやるから

「一週間以内に覚える。いいな」

「いや、あの厚さで一週間はきつい」

「いいな」

「……はい」

千冬の放つオーラに負けた一夏は素直にいうことを聞くのだった

「ちょっと、よろしくて？」

「ん？」

二時間目の休み時間。一人の女性が話し掛けてきた

「えーと、ケシズミ・オットセイさんだっけ？」

「セシリア・オルコットですわ！馬鹿にしますの！？」  
バン！と一夏の机を叩くセシリア

「いや人の名前覚えるの苦手です。ところでオルコット」「なんですの？」

「お前、キバラヘリカメムシみたいな匂いがするな」

### キバラヘリカメムシ

腹部が黄色いヘリカメムシ科の仲間。人によって意見が違うが作者的には柑橘系の匂いがした。ようするにいい匂いのするカメムシである

「……………」

顔を真っ赤にしプルプルと震えるセシリア。それを見ていた篤は一夏に近づく

「一夏。人を虫に例えて褒めるのはやめると前に言っただろ」

褒めてたの！？と驚愕する周りの女子  
付き合いの長い篤はキバラヘリカメムシがどういう虫かわかるため、セシリアのことをいい匂いがすると褒めたのがわかったがセシリアはそうもいかない。カメムシ＝臭いというイメージがあるため、自分が罵倒されたと思ってしまったのだ

「だってほんとにキバラヘリカメムシみたいな匂いがするんだぜ？」

「たしかに同じような匂いだが違うだろ。キバラヘリカメムシのほうがいい匂いだぞ」

「そうか？うん。たしかにキバラヘリカメムシより弱いかな？」  
どうやら篤は完全に一夏に毒されているようだ。虫のことを知らない他人からしたら罵倒されているようにしか聞こえない会話を続ける二人。現にセシリアは爆発寸前である

「……………あなた達、いい度胸してますわねえ」  
いつのまにか篤も対象になったようだ

「しまったな。完全に怒らせてしまったぞ」

「ん？なんで怒ってたんだ？カルシウム足りないのか？」  
ならいいのをやろうとカバンを探りタッパーを取り出す

「ひいつ！」

タッパーの中には虫がたっぷり詰まっていた

「な、なんですのそれ！」

「なにつて、イナゴの佃煮だよ」  
「うまいぞ？と一つつまみ食べる」

「一夏、いきなりそれはきついと思うぞ。それ以前にはやくあやまつたほうがいい」

「え？」

そこで一夏は完全にこちらを軽蔑した目でみるセシリアを見る

「もしかして、俺またやつちやつた？」

「ああ」

一夏は虫以外のことにあまり興味がわかない性格ゆえ、いきすぎて周りを引かせることがなにかあった。そのたびに幼なじみや友人に止められていたのである。虫さえ除けば普通なのだが。……いや、絶対除けないが

と、そこでチャイムが鳴った。なんと微妙なタイミングである

「くつ、おぼえてなさい！」

悪役の捨て台詞みたいな台詞をいって自分の席に戻るセシリア  
同じく席に戻った篤が座ったところでタイミングよく千冬と真耶が  
入ってきた

「それではこの時間は実践で使用する各種装備の特製について説明  
する」

一時間目二時間目と違い千冬が教壇にたったところから重要な授業で  
あることがわかる

「ああ、その前に再来週行われるクラス対抗戦に出る代表者を決め  
ないといけないな」

ふと、思い出したように言う千冬

「クラス代表とはそのままの意味だ。対抗戦だけではなく、生徒会  
の開く会議や委員会への出席。まあ、クラス長だな。ちなみにクラ  
ス対抗戦は、入学時点での各クラスの実力推移を測るものだ。今の  
時点でたいした差はないが、競争は向上心を生む。一度決まると一  
年間変更はないからそのつもりで」

一夏はとくに興味ないのかパルプを撫でている

「はいっ。織斑くんを推薦します」

えっ？と撫でる指を止める一夏

「私もそれが良いと思います」

「では候補者は織斑一夏。他にはいないか？自薦他薦は問わないぞ」

「え、ちよつ、俺！？」

おもわず立ち上がる一夏



「うるさいぞ織斑、席につけ。さて、他にはいないのか？いないなら無投票当選だぞ」

「ええっ！俺そんなのやりたくない」自薦他薦は問わないと言った。他薦されたものに拒否権などない。選ばれた以上は覚悟をしろ」で、でもさあ」

反論を続けようとした一夏を甲高い声が遮る

「待ってください！納得がいきませんわ！」

声の主は先程一夏にキバラヘリカメムシの匂いがすると言われた、セシリア・オルコットだ

「そのような選出は認められません！大体、男がクラス代表だなんていい恥さらしですわ！わたくしに、このセシリア・オルコットにそのような屈辱を一年間味わえとおっしゃるのですか！？」

セシリアの勢いにしんとする教室

「実力から行けばわたくしがクラス代表になるのは必然。それを、物珍しいからという理由で極東の猿にはされては困ります！わたくしはこのような島国までIS技術の修練に来ているのであって、サーカスをする気は毛頭ございませんわ！いいですか！？クラス代表は「ジージージーうるせえよケラ野郎」な、なんですって！？」

「鳴くなら地下で鳴け。地上じゃお前のその甲高い声は迷惑だ」  
今度は間違いなく罵倒をした一夏

「それともなんだ？その金髪ドリルで地面を掘るのが疲れたから地上で休んでるのか？ならその口も休めたほうがいいぜ。あんだだけ甲高い声で喋れば疲れるだろうからな」

「――！決闘ですわ！」

「いいぜ、受けてやるよ」

一夏が決闘を了承したその時、IS学園に大きな爆発音が響いた

「な、なに？」

「事故？」

周りがざわめく中で一夏はパルプと思念通話を行う。ちなみにこの思念通話は人前で自分が喋ったら目立つからとパルプから教えてもらったものである

『パルプ。今の爆発音は……』

『事故などではないね。恐らくマドゥー海賊団だ』

『やっぱりか』

急いで教室を飛び出す一夏

「ちょっと！どこへ行くんですの！」

「（もしかしたら、あいつらなのか？）  
それを追いかけるセシリアと篤

「はあ。山田先生、私が追いかけるから君は教室で生徒達を見ていてくれ」

「あ、はい！」

さらにそれを追いかける千冬

一方の一夏は

「たしかこっちのほうから聞こえてきたはず」  
音の聞こえてきた方向へと必死に走っていた。そんな一夏にまず箒が追い付く

「箒！？ついて来たのか」

「一夏、さっきの爆発音は」

「ああ、たぶんあいつらだ」  
その時、横の壁が爆発した。そのタイミングでセシリアと千冬も追い付く。そして合成獣バクダンアゲハが現れた

「フォー、フォッフォッ。見つけたぞ織斑一夏！」

「な、なんだこいつは！」  
現れたバクダンアゲハに驚く千冬

「パルプ！箒達を頼む！」

「まかせてくれ」  
パルプは一夏の頭から降り人の姿になる。それに驚く千冬とセシリア。一方の一夏はビーコマンダーを取り出し構える

「重甲！」  
ビーコマンダーの羽を展開し上へと突き上げる

「ハッ！」  
一夏の体がビーコマンダーから出てきた光の粒子に包まれブルービ

ートへと姿を変える

「ブルービート！」

「フォーフォツフォツ、現れるシタッパー！」

どこからともなく現れるシタッパー達

シタッパーは各々武器を構えブルービートへと襲い掛かる

「はっ！たあっ！」

襲い掛かるシタッパーを軽くいなししていくブルービート。そのとき突然ブルービートが爆発した

「ぐああああ！」

吹き飛ばされるブルービート。どうもブルービートが爆発したのではなくブルービートの周りが爆発したようだ

「フォツフォツ、どうかな？私のバクダンの威力は」

「このっ！」

ブルービートは立ち上がるとインプットマグナムを抜きレバーを引き1・1・0とボタンをプッシュする

「レーザーモード！」

しかし、撃とうとした瞬間にまた爆発がおきる

「ぐわあっ！」

また倒れる一夏

「フォーフォツフォツ、そろそろとどめだ」

倒れ伏す一夏に近づくバクダンアゲハ

「一夏！くっ、パルプ！私にもビーコマンダーをくれ！」

「な、危険だ！君まで狙われることになるぞ！」

「覚悟はできている。私も一夏とともに戦う」

「……………わかった」

そういつてパルプは懷から一夏のと違うタイプの二本の触角のようなものがついたビーコマンダーを取り出し箒に渡す

「メスカブトムシの力を持った戦士、レッドルへと重甲することのできるビーコマンダーだ。使い方は」

「一夏を見ていたからわかっている。重甲！」

箒はビーコマンダーを右手にもち腕をクロスさせ重甲と叫ぶ。するとビーコマンダーの羽が展開、箒はそれを頭上へとかかげる

「ハッ！」

箒の体をビーコマンダーからでた光の粒子が包んでいきブルービートより小さな角をもった赤いアーマーの戦士、レッドルへと変身する

「はあっ！」

レッドルは腰のインプットマグナムをぬき素早くレーザーモードへと切り替えバクダンアゲハを撃つ

「ぐわあっ！」

バクダンアゲハは怯み後ろにさがる。レッドルはその隙にブルービートに近づく

「大丈夫が一夏!？」

「その声、筭か!？その姿は……」

「パルプに頼んだんだ。さあ共に戦うぞ一夏!」

「……ああ!」

並び立つブルービートとレッドル

マドゥー海賊船

「ちいつ!邪魔物が増えたか。ならば……」  
杖を取り出すドーム

「ムムムム、キエエエエ!」

## IS学園

突如空が割れバクダンアゲハとビーファイター達を吸い込む

「しまった！マドゥーエリアか！」  
と、そこで千冬がパルプに近づく

「パルプだったな」

千冬はパルプの肩をがっしりと掴む

「え？」

「貴様には聞きたいことがたくさんある。話してもらっぞ」  
パルプは千冬を見て顔を青くする。千冬のまとうオーラがかなり怖いものになっていた

マドゥーエリア

ブルービートとレッドルは荒野に放り出されていた

「くそっ、マドゥーエリアか」

「ここがマドゥーエリア……なにもない場所だな」  
周りを見回すレッド

「フォー、フォッフォッ！さっきはよくもやってくれたな！」  
二人が空を見るとバクダンアゲハが飛んでいた

「これでもくらえ！」

バクダンアゲハが羽を大きく羽ばたかせると二人の周りが爆発する

「くっ！またいきなり爆発が！」

「なにが爆発しているのかわかればいいのだが……」

「フォーフォッフォッ」

バクダンアゲハはまた羽を羽ばたかせる。そこでレッドはあることに気づく

「あれは……ビートスキャン！」

レッドは相手のことを調べるビートスキャンを行う  
再びおこる爆発

「くっ、やはり。なら！」

レッドはインプットマグナムのレバーを引き8・1・8とボタンを押す

「フォッフォッ。なにをするかは知らんが。これで最後だ！」  
また羽を羽ばたかせるバクダンアゲハ

「いけ！」

レッドはバクダンアゲハにインプットマグナムをむけ引き金を引



く。するとさっきまでレーザーが放たれていた銃口から火炎放射が放たれる

「ギャアアアア！」

火炎放射はバクダンアゲハにギリギリとどかなかったがバクダンアゲハはなぜか爆発。燃えながら地上に落ちる

「な、なんだ！なにがおきたんだ！？」

「やっぱりな。やつは羽を羽ばたかせ粉をばらまき、粉塵爆発を引き起こしていたんだ」

レッドルがバクダンアゲハをビートスキャンで調べたときバクダンアゲハの羽から粉がばらまかれ、さらにそこに火種を放り込んでいるのがわかった

「だからやつが火種をほうり込む前に火炎放射で爆発してやったんだ」

「おお！凄いな箒！」

「そ、そうか？「貴様らあ、調子に乗るなよお」！」  
炎の中、立ち上がるバクダンアゲハ

「しつこいやつだな。箒！とどめをさすぞ！」

「ああ！」

「「ステインガーウエポン！」」

「ステインガーブレード！」

「ステインガープラズマー！」

各々の固有武器を構えるブルービートとレッドル

「フォーーーーー！」

「はあっ！」突進してくるバクダンアゲハ。しかしレッドルのステインガープラズマーから放たれたネット状のビームが動きを止める

「ビートルブレイク！」

ステインガーブレードの背面がスライドしファンが回転。ブレード部分も回転している状態で必殺の一撃ビートルブレイクを動きの封じられたバクダンアゲハに決める

「ギヤアアアアア！」

バクダンアゲハは大きな悲鳴をあげ爆発した

空が割れ元いた場所に戻ってきたブルービートとレッドル。そこには険悪な雰囲気のパルプと千冬がいた

変身をといた一夏の姿を見つけた千冬は一夏に近づきこう言った

「一夏、戦うのをやめろ」

## 第2話 織斑一夏抹殺命令！？登場、二人目のビーファイター（後書き）

粉塵爆発についてですが、ウィキペディアを見てこんな感じかなと使いました。いろいろ間違っている気がしますますが怪物ということで大目にみてください

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2315z/>

---

重甲ビーファイターー夏

2011年12月21日16時45分発行